

No. 33

平成24年2月発行

静岡県老人福祉施設協議会

〒420-0856静岡市葵区駿府町1-70

静岡県総合社会福祉会館内

TEL 054-653-2311 FAX 054-653-2312

E-mail : sizurosi@vesta.ocn.ne.jp

<http://www.shizu-roshikyo.jp/>

しづ老施協

卷頭言

「在宅委員会が在宅事業部会より 移行して1年余がたちました」

静岡県老人福祉施設協議会
在宅委員会 委員長

仲亀秀樹



在宅委員会を代表してご挨拶させていただきます。

昨年は東日本大震災、富士・富士宮地震、台風十二号・十五号と災害が続き、本県でも大きな被害に見舞われ、関係者の皆様には大変御苦労されたことと思います。改めてお見舞い申し上げます。

これから在宅事業は起こりうる災害に、また予測される東海地震に地域ネットワーク構築、情報収集、介護支援、生活支援に利用者の安全を守る観点から期待されることと思い

ます。

老人福祉施設協議会の新たな組織編成が行われましたので、在宅委員会についてご報告します。在宅委員会は在宅事業部会より二十三年三月に移行し、昨年は部会から委員会への移行を重点課題として取り組んでまいりました。そして、本年度は委員会の提案を事業化して研修を計画し、昨年十一月二十四日に「これらの在宅サービス」をテーマに在宅研修を開催させていただきました。この研修に多くの会員皆様に参加していただき、委員長として御礼申し上げます。

さらに、委員会の取り組みとして、デイサービス事業所のアンケート調査を実施しました。現在取りまとめ中ですが、会員皆様のご理解ご協力に感謝申し上げます。

現在、平成二十四年度の制度改定が審議されており、在宅サービスについて「地域包括ケア」が中心となる新たなネットワークが考えられ、利用者が必要なサービスを生活圏域で受けられるよう設定し、地域社会で支えられる仕組みが構築されます。

ア) サービスは、在宅事業所、福祉施設、高齢者向け住宅（サービス付き）、医療機関、福祉事業センター、二十四時間対応定期巡回・随時対応

サービス（訪問介護・訪問看護）及び住民参加等加えた多様な地域密着型サービスが提供されます。また、介護報酬の見直しも検討され、時間単位報酬など報酬に対し見直しが検討されています。

介護社会を迎える二十四時間介護、医療それに伴う人員の確保、拡大する認知症、虐待、孤独死等、多様化する家族状況、介護職員による疲の吸引、看取り支援、事業所間競争や事業所のスキルアップなど取り組む課題も多い制度ですが、利用者福祉の活性化に取り組んでいきたいと思います。平成二十四年度改定は在宅事業に大きな改定となるでしょう。

在宅事業は生活に於ける介護の一端を担うだけでなく、利用者生活を左右する事業に変わりつつあります。在宅事業は地域、利用者に於いてアンテナの役目を持ち、利用者が望む在宅サービスを視点に実情にあつた支援を提供し、そして制度と理念に向かいながら行動する事業となります。

今後の在宅委員会に会員皆様の更なるご支援ご協力を願い申し上げます。

（特別養護老人ホーム
「シャローム富士川」施設長）

特集一 「介護の日」街頭啓発活動について

「介護の日」は、介護への理解と認識を深めていただくための日として、平成二十年七月に制定されました。今年度も各支部において街頭啓発キャンペーンを実施しましたので、その状況を報告します。

西部支部

「介護の日」活動報告

十一月十一日午前十時より、浜松駅北口前にて、市民の皆様に、介護・福祉に対する社会的理...

ただくため「介護の日」の街頭キャラクターペーンを実施しました。

当日は、老施協西部支部栗野支部長をはじめとする会員・役職員、約六十名の参加を得て、浜松駅前の街行く人々に対し、「介護」への周知、啓発活動を行いました。老施協マスコット「ケアットちゃん」も華を添えて下さいました。

前日のテレビ報道でも「介護の日街頭キャラクターペーン開催」が案内され、二千個用意したキャラクターペーンと記念品（携帯ポーチ）は、その品物の手軽さもあってか、開始から三十分で配布を終了し、普段、介護とは無縁と思われる若い世代、サラリーマンの方々をはじめ、市民の皆様に広く「介護」についてPRすることができました。



「介護の日」街頭キャンペーンに参加して

十一月十一日、JR静岡駅北口地下道にて、四回目となる「介護の日」中部支部街頭啓発が実施されました。県内ではJR三島駅、浜松駅でも同様に啓発活動が行なわれました。

中部支部では約四十人の施設長や職員の方々が、メインキャラクター「ケアットちゃん」と共に参加し、地下街を往来される市民の人達に「介護の日」をアピールしました。

十一月十一日は「いい日、いい日、あつたか介護ありがとう」を念頭に「いい日、いい日」にかけた覚えやすく親しみやすい語呂合わせとして制定されました。介護についての理解と認識を深め、介護サービス利用者及びその家族、介護従事者等を支援するとともに、これらの人達を取り巻く地域社会における支え合いや交流を促進する観点から、高齢者や障害者等に対する介護に関し、国民への啓発を目的的に実施することを目的として設定された日です。

行き交う人々に幟旗を立てて啓発物品を手渡してはみましたが、果してどの程度目的にかなったメッセージが伝えられたかとても自信がありません。



中部支部

「介護の日」街頭キャンペーンに参加して

誰しも避けては通れない年を取ることのこと、そして、その先にある「介護」の問題は年齢が多くなればなるほど身近な自分の問題として捉えている様に感じました。

その時出会った介護を学んでいる女子学生のひたむきな瞳の輝きは、この活動の一貫である福祉人材の確保・定着を促進する取組みに、一條の希望の光に見えました。

(記) ケアハウスレインボーランナーズ 鈴木こづえ)

「介護の日」の啓発活動を終えて

十一月十一日のJR三島駅北口前。開始時間までに約三十名の職員が集結し、気温十二度、天候は雨という悪条件の中、予定通り午後四時から「介護の日」の啓発活動が開始されました。

東部支部木下支部長と県老施協石川三義会長からご挨拶をいただいた後、職員各自が紙袋等に小分けされた配布物を持参し、一部の職員はのぼり旗を掲げ、北口を中心に散らばり活動に入りました。

配布物は、ケアットちゃんと介護のイメージアップを謳つたポケッタ・ティッシュにA7サイズのメッシュ・ケース。小銭やメモ紙、カギなど小さくて大事なものをまとめて収納し、ポケットや鞄に入れておけば、紛失防止にも役立ちそうな一品。

駅前に並んだのぼり旗は、スカイブルー地に「十一月十一日は介護の日」の白抜き文字。爽やかにまとめられたデザインには「介護の将来が青空のように晴れ渡ってほしい」という願いかもしれません。

「今日は介護の日です」と響く職員の声、「よろしくお願ひします」と配布物を手渡す職員の姿。合羽に身を包み、カイロで暖を取りながらの啓発活動は午後四時三十分過ぎに無事終了しました。

冷たい雨の中、傘を片手に下向き加減で足早に歩き去ろうとする者が多かつたが、受け取った人たちの表情から概ね好評であったという手応えを感じた一日でした。
ご協力いただいた支部役員及び会員の皆様、お疲れ様でした。ありがとうございました。

(記 特別養護老人ホーム

みくらの里 川島優幸)



施設名称の由来と想い

「二一ノ子に対応した

回廊式特養としての誕生」

特別養護老人ホーム 翠松苑
施設長 村瀬 勇

天竜厚生会の本部敷地内に当苑が誕生したのは昭和五十四年の四月、今から三十二年前の話です。（定員八十人の特養、後に七人の短期入所を併設）この頃は当法人の建設ラッシュ時であり、前後の年にも幾つかの障害施設等が作られています。

開設に至るまでは、法人内で既に運営されていた特養での身体障害と精神障害との混合処遇による不備や、障害施設から高齢化によって特養に移行するケースの増加が挙げられており、解決すべき課題とされていました。

こうしたこと背景に、認知症等の老人性精神障害のケアを専らとした上で、平屋建ての回廊式構造が採用されることとなりました。当時は精神障害に対応した特養はなく、設備的な面からも画期的な施設であったことが推測されます。

施設名の由来ですが、現在でも法人本部敷地内には多くの松林が存在します。施設敷地部分にも開設前までは多くの松の緑が生い茂っていたようで、その緑の松葉がさぞ印象的であったのでしょうか、それに因んで「翠松」と名付けられ、今でも玄関先には、開設前の時代を象徴するかのように一本の美しい松の木が大切に植えられています。

この松の木は九月の台風十五号の暴風にも負けず、見事に耐え抜いた強い松でもあります。私だけが勝手

に解しているのですが、この残された一本の松の木には、先人達の熱い想いが込められているように思われなりません。

開設当時から時代は大きく流れ、古い部類に位置づけられてしまいますが、長年培ってきた介護ノウハウ等によりこれまで順調に運営されています。

三十二年が経ち、今後の長期的な視点に立った今、障害施策が著しく変化していることと、開設当初の狙いを再考することを踏まえて、横断的な領域に対応できる施設として生まれ変わら必要があると日々感じています。



東日本大震災

災害ボランティア活動報告

「私たちができること」

特別養護老人ホーム 燦光
介護支援専門員 中村圭吾

活動期間（第一回）平成二十三年六月十六日～六月二十日、（第二回）平成二十三年十月二十日～二十四日。

震災より半年が過ぎ、高台より遠くを見渡すと、木々は青々としげみ、カモメが飛んでいます。社会科の教科書で習つたリアス式海岸を私は初めて見たのですが、波は穏やかで美しい景色が広がり、感動すら覚えました。ただ、半年前まであたり前に暮らしていた人がいませんでした。町がありませんでした。家屋は瓦礫と称され、撤去作業に追われていました。いままで全く手つかずの場所もありました。実際に現地に足を運んだことで「今までテレビで見ていたことが本当だつたんだ」「これが現実なのか」「なんでこの町が…」どうしてこの人々が…」ということしか思い浮かびませんでした。

私は、静岡県災害ボランティアの一員として、六月に岩手県大槌町で避難所や仮設住宅で暮らす身体的な支援が一部必要な方の入浴の支援、必要に入浴支援を通じニーズの調査、必要

物品の調達・配達を行いました。
避難所は、一人一畳から二畳ほど
のスペースにダンボールで敷居を作
り、他人の目を気にしながら寝食共
にその場で済ませている。食べたい
物が食べられない、体を動かす機会
が少なく著しい筋力低下がある。一
人が風邪を引くと気を付けていても
風邪が蔓延してしまう、二次災害と
もうべく盗難が相次ぎ、失望され
ている方々がいる等の課題を抱えて
いました。

物が食べられない、体を動かす機会
が少なく著しい筋力低下がある。一
人が風邪を引くと気を付けていても
風邪が蔓延してしまう、二次災害と
もうべく盗難が相次ぎ、失望され
ている方々がいる等の課題を抱えて
いました。

物が食べられない、体を動かす機会
が少なく著しい筋力低下がある。一
人が風邪を引くと気を付けていても
風邪が蔓延してしまう、二次災害と
もうべく盗難が相次ぎ、失望され
ている方々がいる等の課題を抱えて
いました。

は、私は三食何不自由なく食事を食べることができ、毎日お風呂に入ることができる。家に帰れば、誰に気を使うことなく眠ることができ
る。そんな当たり前の生活がこ
こにはなく、そんな方々からの「あ
りがとう」の言葉の重さ、意味を考
えさせられました。達成感よりも申
し訳なさの気持ちが強かったです。
十月は、岩手県陸前高田市気仙町
上長部地区、大槌町赤浜地区、釜石
市箱崎地区で自家の瓦礫拾い、道路
の整備・清掃、菜種や麦の種まきの
活動を行つてきました。私たちが活
動した自宅、道路の整備・清掃をし
た場所は、都市復興計画の中数カ
月から数年後には、埋め立てられて
しまう場所でした。一見無駄なこと
だと思われがちな活動ですが、實際
に仮設住宅で暮らす現地の方々から
「家（基礎の部分のみ残っている）
がキレイになつたことで、震災後初
めて家に戻る決心をし、行くことができた。」「キレイになつた家を見て、
その夜はぐっすりと眠ることができ
た」等の声が聞かれ、心のケアの一
面も担つていました。

は、私は三食何不自由なく食事を食べる
ことができる。毎日お風呂に入
ることができる。家に帰れば、誰
に気を使うことなく眠ることができ
る。そんな当たり前の生活がこ
こにはなく、そんな方々からの「あ
りがとう」の言葉をいただきま
した。その時の率直な気持ちとして
現地の方々、全国各地から集まつた



ボランティアの方々がいる。活動中、現地の方からの「ごくろうさま、ありがとう」という、ねぎらいの言葉が活動を行う私たちの活力になつて
います。
復興までの道のりは長く継続的な
支援が必要と知りつつも、テレビなどマスコミに取り上げられる頻度も減り、ボランティアの数も日に日に減少しています。人が互いに支え合う。人の復興があつてこそ真の復興への第一歩ではないかと考えます。
現地に足を運んできた者として「目で見て、感じてきたことを自分の言葉で伝え、風化させない」これが今、私にできることだと考えています。

特集二

【第三回高齢者福祉研究大会優秀発表事例の紹介】

前号に引き続き優秀発表者の皆さんから報告していただきます。

「下剤ゼロを目指して！」

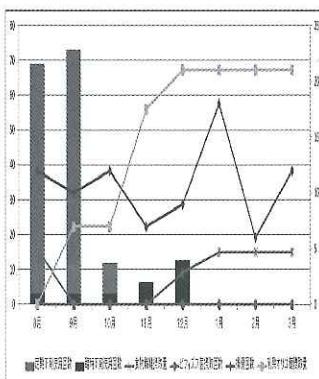
特別養護老人ホームみなどの園

排泄委員会

無排便日数五日目：下剤や浣腸による泥状便が続き、腹痛や便失禁などで苦しむご利用者を目の当たりにすることはないでしょうか。排泄委員会において、このような現状をなんとか軽減することはできないだろうか、という声が多数あり、下剤に頼らない自然な排便を目指し、オリゴ糖による排便コントロールに取り組むこととなりました。

オリゴ糖は以前からみなどの園でも使用していましたが、はつきりとした効果が見えないまま使用している状況でした。オリゴ糖の科学的根拠に基づいた効果の立証を確認したうえで、より効果的で安全に使用したかったこと、コスト面でも安価だったことが導入のきっかけでした。

三十二名の対象者でしたが、排便状況や下剤使用状況をグラフ化し経過を追跡していくと、かなりの個人差がみられ、効果が観察に現れた方と、ビフィズス菌粉末や食物繊維粉末等を附加しても全く効果が見られない方が顕著にグラフに現れました。一年間のデータ分析の中で、定期



オリゴ糖+食物繊維で下剤の使用量が減ったCさん

そこでオリゴ糖の効果が現れた方のみを対象としてご利用者の負担の軽減を図りました。また、今までオリゴ糖の摂取方法が異なる為スタッフが把握しにくかった点をオリゴ糖十四グラムで一定量としたことで、より継続可能な環境を作ることができたと言えます。

その後の三ヶ月経過においても、向けての取り組み

特別養護老人ホーム 燐光

生活相談員 細田

介護福祉士 勝亦志津香

これまでオリゴ糖の摂取方法が異なる為スタッフが把握しにくかった点をオリゴ糖十四グラムで一定量としたことで、より継続可能な環境を作ることができたと言えます。

そこで浮き彫りになつたのが、同じ利用者様の同様の事故が多いことでした。事故報告書により対策まで検討しながらなぜ繰り返し事故が減らないのか。このことが大きな課題となりました。その要因として職員の事故への意識付

グラフは安定した排便コントロールの値を示しており、再度スタッフにアンケートを実施したところ、オリゴ糖の効果について七十六%、ご利用者・スタッフへの負担については七十%以上が負担に感じないと回答でした。

終わりに、この取り組みにより確実に排泄に対するスタッフの意識の変化がありました。個々の排便状況に合わせた自然排便を考えるようになり、布パンツへの移行を目指すようになります。また今回、多職種の協働であらゆる視点から取り組めたことが「継続した介護」へ繋げられたのだと思います。

終わりに、この取り組みにより確実に排泄に対するスタッフの意識の変化がありました。個々の排便状況に合わせた自然排便を考えるようになり、布パンツへの移行を目指すようになります。また今回、多職種の協働であらゆる視点から取り組めたことが「継続した介護」へ繋げられたのだと思います。

そのため、事故報告書の改善に取り組むこととしました。新たに作成した事故報告書には繰り返し事故回数の欄を設け、この利用者様が複数回事故を起こしていることをわかるようになります。また、発生前の利用者様の状況を記入することにより要因を深く掘り下げるようにしました。また、今まで記載でしたが、職員が全員日を通してから業務に入る介護、看護日録に記載を記入し、確認のサインをもらいうようにしました。

また、生活のしおりは、ご家族へ施設での事故防止の取組み、ご家族にご協力いただきたいことなどを説明し、ご家族に生活リスクを共有していただきました。契約時にご家族にお渡ししています。そして、燐光では安全対策委員会のほか、八つの委員会があり、それぞれが専門的な知識・技術を勉強し、業務の改善に取組んでおり、事故防止には他の委員会との連携は不可欠です。

しかし、このような取り組みをしてなお、繰り返し事故が発生しているのが現状です。今後についても「やるべきことをびっくりするぐらいきちんとやる」という事故防止の基本を忘れず、また「同月の同一利用者の同一事故をゼロにする」ことを目標として職員へ啓蒙しています。

尊厳ある看取りケアを目指して

特別養護老人ホーム おおつか苑

介護職員 影山達二

法人設立二十周年を迎えた当苑は利用者一人一人がその人らしく自立した生活を営むことができるよう支援することを目指す、という法人理念のもとに運営され、入所者の主体性を第一に考えています。

平成二十一年六月に入所されたR氏は、それまでの病院ではつなぎ服を着て車椅子に拘束されていました。おおすか苑に入所するにあたり、R氏の意思を尊重したR氏らしい生活を作ることを課題とし、①おむつをパンツに替えトイレを使用する、②行動範囲を拡大する、③食事の自力摂取の継続、④看取り期も最後まで生活リズムを継続する、という具体的な取り組みをあげ、新しい生活を始めました。

拘束もなくなったために自分を取り戻し気持ちが自由になったのか、今まで以上に会話ができるようになりました。R氏に対し、ご家族の面会は多くなり、居室で長い時間会話をする姿が見られるようになりました。

平成二十二年九月、転倒し大腿骨を骨折してしまいますが、手術や安静にすることよりR氏の「普段の生活」を送る選択をしました。ご家族も職員と一緒に介護に携わり、ユニット型であるR氏の居室にソファやテーブルを持ち込み、一緒に食事や、奥様は編み物をしたり。居室が家族



の生活の場にもなりました。

平成二十三年二月、重症の「腎不全」と診断されたR氏は「看取り介護」となりました。しかし、変わらなかつたことはR氏のできることをこれまでと同じようにしながら生活することでした。亡くなるその日までどう生きるか、という前向きな介護をすることを家族と職員が同じ思いでいたのです。

看取りケアとは看取り期になつてから始まるのではなく、入所した時からその方が安心できる生活を作り介護していくことから生まれるのはないでしようか。

その方らしい生活をいかに過ごすか、亡くなるその日まで、どう生きるか、生きていたか、そのための介護がどのようにできるかを考え行動することで「尊厳ある看取りケア」をなしえることとR氏のケアで実感いたしました。

新加入施設紹介

平成二十四年一月一日現在

ケアハウス

ケアハウス はるかぜ

法 人 名 社会福祉法人「春風会」

開 設 日 平成16年4月1日開設

(入会申込 平成23年6月13日)

施 設 長 山 下 勇

所 在 地 沼津市平沼929-1

入所定員 10名



特別養護老人ホーム

さつきフレンドハウスえん

法 人 名 社会福祉法人「さつき福祉会」

開 設 日 平成23年4月1日開設

(入会申込 平成23年10月1日)

施 設 長 馬渕 卓

所 在 地 静岡市清水区三保16-1

入所定員 100名

デイサービス 25名

短期入所 10名



「平成の杜」に移転して思うこと

養護老人ホーム 平成の杜

施設長 若林民子

ですが、要介護者の他に精神疾患、聾啞、弱視等、様々な障害をもつ方が生活する養護こそ、個室と限定することなく職員の目の届く多床室も必要であると痛感します。

小山町立養護老人ホーム「福寿荘」から、小山町営住宅跡地への移転とともに、名前も「平成の杜」と改め、地域密着型特養二十九床とショートステイ五床、現在建設中のデイサービス四十人を併設した民設民営の養護老人ホームが誕生し、平成二十三年五月から新生活を始めております。

小高い緑の山々に囲まれ、雄壮な富士山が眼前に広がる自然豊かな施設です。様々なイベントや大きな行事、慰問や防災訓練も合同で実施しています。棟続きの建物内に措置入所の方々と、介護保険利用の方々が仲良く交流している施設は大変珍しく、静岡県では初の試みで、全国的にも稀なケースではないでしょうか。

福寿荘での四人部屋から個室での生活となり、入所者間のトラブルはなくなつたものの、誰にも干渉されない自由さからか、居室内がだんだん乱雑となり、入所者によつては生活意欲の低下もみられるようになりました。同室者に心を配り、節度を持つて生活する以前の生活も捨てがたい思いです。プライバシーも大切

実態を関係省庁や多くの人に実感して頂く為に、養護の必要性を現場から大きく発信していかなくてはならないと思っています。措置控えの原因となつてている財源負担の見直し、職員の処遇改善、今後の養護の位置づけ、方向性など課題が山積みです。

静岡県下の養護老人ホームが結束を強め、思いを一つにして、これからも行政に窮状を訴え、理解を求めていきたいと思つています。

今日も喫煙所から養護と特養のお年寄りの賑やかな笑い声が聞こえています。静岡県で初の試みである私共のモデルケースが良い実を結び、少しでも老人福祉施設の改革への参考になればと願つてやみません。

● 施設のユニーク行事

「音と香りの中で」

特別養護老人ホーム カリタス21

毎日の生活の中で、食事はとても大切で大きな意味を持つものです。食事をおいしく、楽しんで食べて頂くための工夫の一つとして、フロア調理を行つています。

毎月メニューを決め、各ユニットをまわっています。

出来上がって、盛り付けられた料理が配膳される日常の食事とは異な

り、フロアのキッチンを利用して、利用者と一緒に料理をし、盛り付け、好きなものを好きなだけ、利用者に取つて頂き、召し上がるつて頂きます。私達は、家庭の雰囲気を感じながら、料理を作る音と共に香りも広がり、出来上がつた料理はすぐにフロアの食卓に並ぶことで、温かいもの、冷たいものも含め、季節を感じながら、より食事をおいしく、楽しく食べて頂くために、各セクションが協力しながら行つています。

夏には冷えたそうめん、揚げたての天ぷら、冬にはアツアツのラーメンやおでん、鍋など普段の食事では、取り入れにくいメニューも盛り込んでいます。利用者の嗜好や季節に合わせ、いつもと違う雰囲気に食欲も出たりと皆さんに楽しんでもらつています。



新加入施設紹介

平成二十四年一月一日現在



小規模多機能型居宅介護（単独デイ）

ひなた

法人名 社会福祉法人「三宝会」
開設日 平成23年4月1日開設
(入会申込 平成23年11月1日)
施設長 牧野延幸
所在地 袋井市浅羽84-7
入所定員 25名

活動報告

老施協

★二十三年十月二十一日、県健康

福祉部（長寿政策局）との懇談会

について、「県政さわやかタウンミ

ーティング」を兼ねて県総合社会

福祉会館にて開催、老施協からの

〔質問・要望等〕を中心に意見交換

★二十三年十一月十一日、「介護の

日」啓発事業として、東部（JR

三島駅）、中部（JR静岡駅）、西

部（JR浜松駅）において、それ

ぞれ街頭啓発キャンペーんを実施

★理事会 二十三年十一月十二日、

県老施協役員改選等について協議

企画経営委員会

★二十三年十月六日、県との懇談

会における要望事項等の協議・取

りまとめ、キャリアパス制度導入

に関わる概況調査、「介護の日」の

取組み（街頭啓発活動）、しず老施

協33号の企画等について協議

研修委員会

★二十三年九月二十九日、介護力

向上・全体研修会を県総合社会福

祉会館において開催、九十一名が

受講

★二十三年九月二十九日、介護力

向上研修（研究発表A g a i n !

）研修について協議

★二十三年十一月二十二日、介護

力向上研修（研究発表A g a i n !

）研修を県総合社会福祉会館に

在宅委員会

★二十三年十一月十九日、軽費

委員会施設長研修を開催、八名が

参加

養護委員会

★二十三年十一月二十九日、県と

の懇談会等の内容、施設利用者に

対する扶助費、次期役員改選、現

況と課題について協議

軽費委員会

●二十三年十一月十九日、軽費

委員会施設長研修を開催、八名が

参加

【21世紀委員会】

おいて開催、百四十六名が受講

★二十三年十月二十六日、異業種

講師研修会を静岡音楽館において

開催、六十七名が受講

交流研修、介護の日街頭啓発活動、

広報研修等について協議

編
集
後
記

● 昨年を振り返ってみますと、三月十一日東日本大震災、原発事故、三月十五日富士宮市の直下地震に始まり計画停電、節電等と施設運営・管理に大変な年でした。その上に夏の熱中症対策、台風、大雨被害等が続き、自然災害の恐ろしさを体感した一年でした。政治の世界も同様に、内外で大揺れの状況に見られるが皆様いかに感じますか？（持田）

● つい最近、健康診断の結果、入院治療を余儀なくされ、看護・介護の世界を覗くことができました。やはり家族・家庭が一番幸せです！（澤田）

● 昨年は、東日本大震災に始まり原発事故による放射能汚染、また計画停電や節電対策に続き、九月の台風被害と「災害」に翻弄された一年でした。また政治、経済、外交などの大きな課題も今年以降に持ち越され、このままでは日本の将来が案じられてなりません。しかし、その災害によって培われた人と人との「絆」が、日本再生の大きな希望となることを信じた（山中）